知とエレガンスの幻想世界

ニール・テトコウスキー

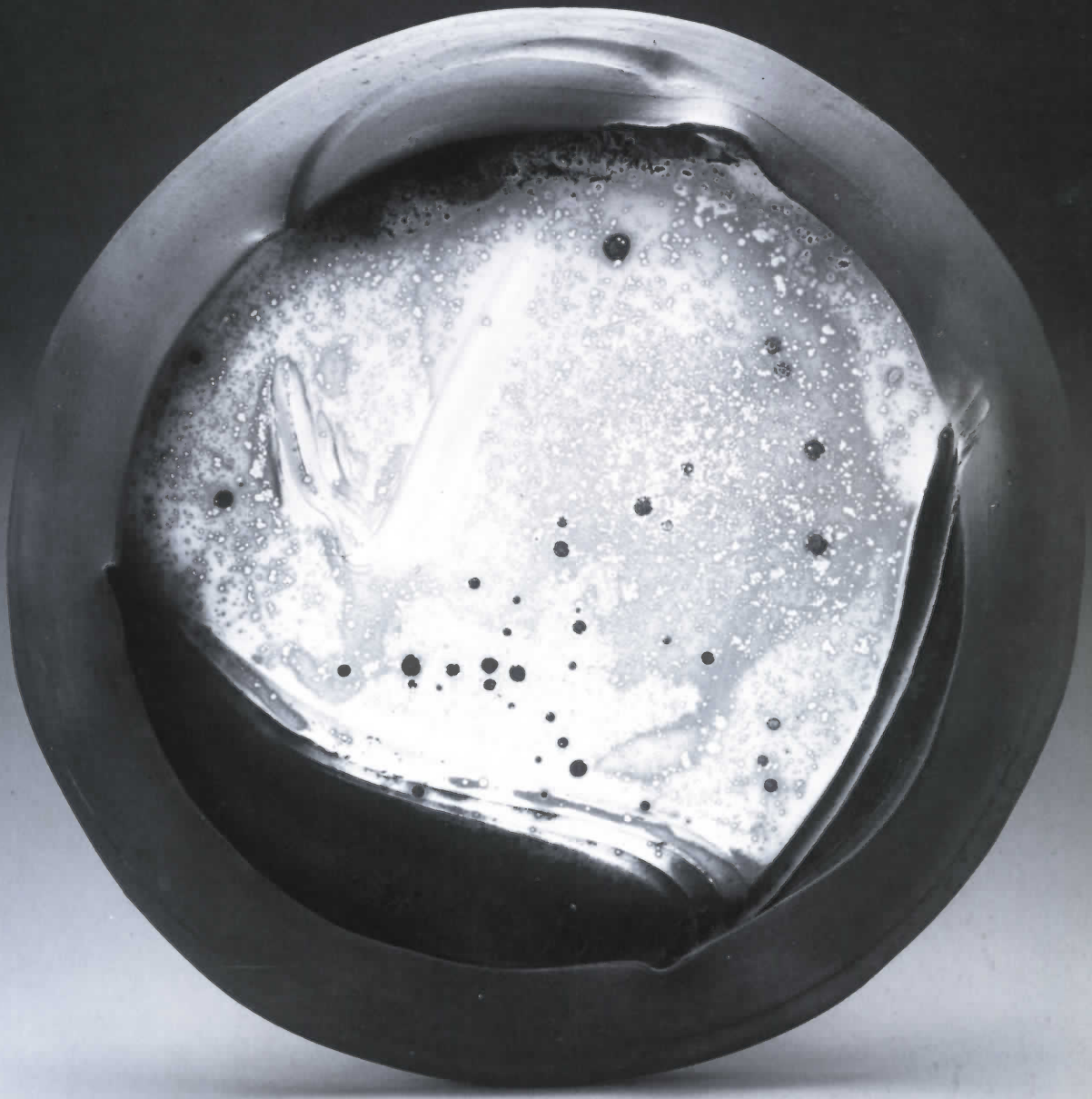
「ORANGE SWIRL」 径95.0cm 1983年 （撮影：次頁ともJAMEY STILLINGS）

NEIL TETKOWSKI

「BLUE VESSEL」 径30.0cm 1983年

「MIDNIGHT」 径91.0cm 1985年

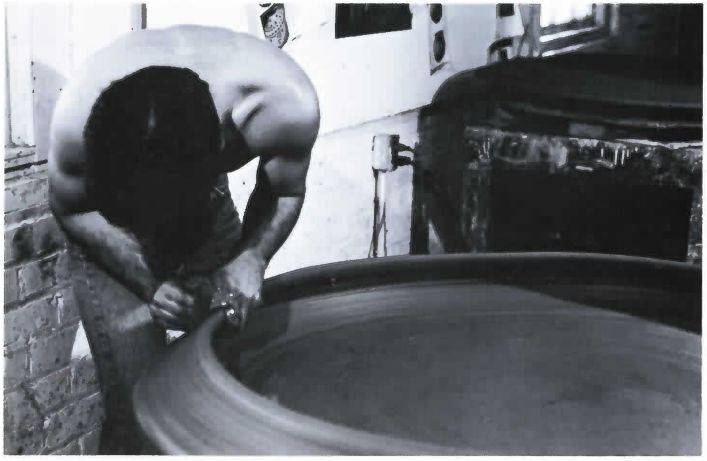
「NEW DAWN」 径91.0cm 1985年



「CATACLYSMOS」 径59.0cm 1984年

アメリカきっての若手作家

里中英人



ニール・テトコウスキー氏(撮影:3点ともJON BRIDGE)

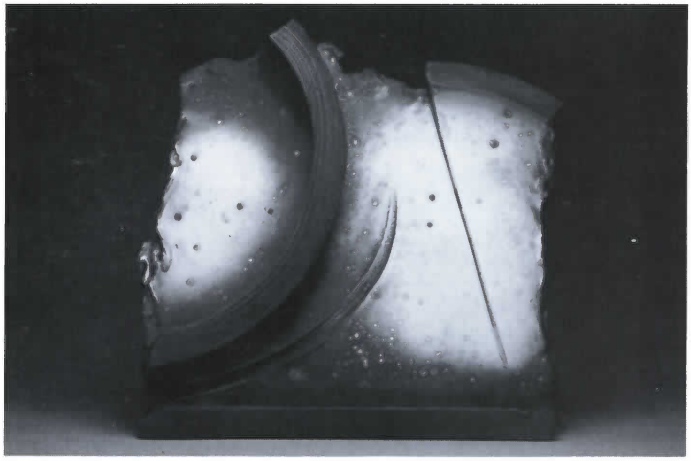
ニール・テトコウスキーは、一九五五年生まれの若干三十歳というアメリカきっての若手作家だ。彼の芸術家としてのエネルギッシュな行動力と、作品の定評度からいっても、既にアメリカでは際立った存在のようだ。それは、彼が国際陶芸アカデミィ学会のメンバーの一人に推挙されていることからしてもうなずけるし、アメリカ国内や他の国々での五十数回にも及ぶグループ展への招待参加、それに、ニューヨークのエレメンツ・ギャラリーや、シカゴのオブジェクト・ギャラリーを初めとするワンマンショー開催の数々、これらが彼の力量の確かさを十分に証明するのである。一九八三年の初来日の折、彼の作品のスライドや写真をみたが、それらは見事な作品群であった。そして昨年、アメリカの彼のアトリエや、彼が教えるニューヨーク州立大学バッファロー分校のスタジオ、ニューヨークのギャラリー、それにコレクターのコレクションのなかの彼の作品の数々に実際接してみて、改めて彼の豊かな才能をこの眼で確かめることができた。

彼は大変早熟である。十七歳の高校生のときに、はや陶芸家になることを心に決めていたという。父親が大学教師として美術を講じ、母親も高等学校の美術教師という恵まれた環境からすれば、彼が陶芸家になることを早々に決めたのも、極く自然の成り行きだったに違いない。バッファロー郊外にある、彼の父親の素適なアトリエに案内されたとき、庭に点在する父親の造形作品、室内の壁面に飾られた母親のスケッチや織、染の作品に混じって、彼が高校生時代に焼いたという数点の陶芸作品をみせられた。それらの殆どは器物であったが、既に、それらには彼のいまの作品を予兆させるに十分な存在感があった。

彼には、少年時代をイタリアのトスカーナ地方のシェナで暮したという素晴らしい体験があった。起伏に富んだ丘陵地帯にみえかく

上 「SPACE DISK」 径95.0㎝ 1985年
下 「BLUE SWIRL」 径45.0㎝ 1983年 (撮影:J MEY STILLING)

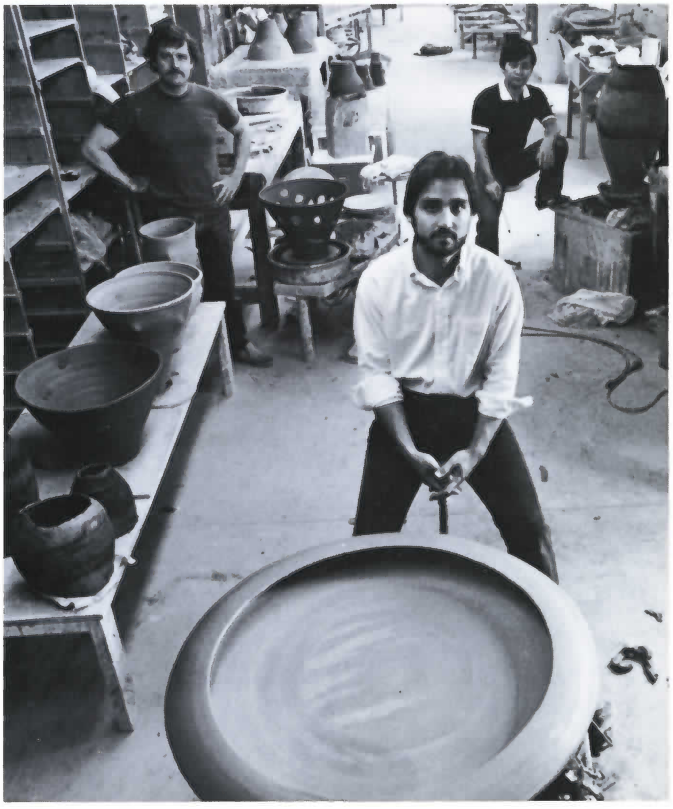
れする中世、ルネッサンス期の建築群や、オリーブの樹々等美しい牧歌的な田園風景の全てが、強烈に彼の脳裏に焼きついて離れない。おそらく、このような少年時代の鮮烈な印象が、「美しい田園環境の中の、陽光を浴びるアトリエで陶芸作家として生きることを夢みていた」と早熟なニール少年を逸らせたのであろう。更に彼の夢は、ヨーロッパやアメリカ、メキシコを旅することによって、一層確かなものとなって膨らんでいったらしい。その後、アルフレッド大学で学ぶことになった彼は、造形芸術全般について、また技術についても研鑽を重ねるうちに、陶へののめり込みはいよいよ深まるばかりだった。しだいに、陶芸家としての行き方よりも、芸術家としての行き方に憧れを持つようになるのである。つまり、ニールの感じたままの「いま」を土で表現しようという、芸術家としてのはっきりした姿勢を示すのである。だからといって、彼の表現が、ポップ・アートなどにみるオブジェ的な表現へと進んだわけではない。あくまでも、徹底したろくろにより生みだされる二次元、三次元の追究というか、全く伝統的なろくろ成形によるうつわからの展開が、彼の芸術表現の大きなポイントになっているのである。アメリカ陶芸界の巨匠ピーター・ボルコスの作る抽象表現主義的な器物と、一見似かよってはいるが、ニール自身がボルコスとの類似性を否定するように、共にろくろによる成形ではあるが、決定的に形の上で異なるのは盤状フォルムの〝縁作り〟の差であろう。そもそもボルコスとニールの間には、親と子に近い年齢差があるわけで、こうした二人を対比して語るのは無謀かもしれない。しかし、ボルコスがバーナード・リーチや濱田庄司の陶芸に魅せられての出発ということか



上「VOLCANIC TREK」 径30.0cm 1982年
中「WALL PIECE, ORANGE/WHITE」 横70.0cm 1984年 (撮影:上,中 JAMEY STILLINGS)
下「VESSEL」 径40.0cm (撮影:ROMAN SAPECKI)

らして、ニールが世代的に何らこの二人とは関係はなかったが、ボルコスの出発点とかなり共通するものがある。そういった意味からボルコスを「剛」の作家と謳えば、ニールは「知」の作家といえるのではないだろうか。ニールも結構大柄で逞しい作家だが、ボルコスの比ではない。ボルコスの土を力で抑えるというか、ボルコスと土との激しいぶつかりあいから生まれでるあらあらしい彼の造形と比較した場合の、ニールの作品のなんとエレガンスなことか。ボルコスの器物が一見自由奔放な表情をみせるのに、究極的には結構、器物としておさまってしまうのに反して、ニールの作品には器物を越えた何かがある。即ち、ニールのそれには現実を越えたというか、とてつもない大きな空間への拡がりがみるものに迫ってくるのである。ニールの並々ならぬ才能の鍵がここに隠されているように思う。ニールの作る作品は殆どが大作だ。いわゆるアメリカ的といわれる大きなもの、大きな作品への挑戦が彼の全てである。ちなみに作品の直径は九十センチ、九十五センチといった大作ばかりである。アメリカに旅した者であれば、誰しも大国アメリカを必然的に意識せざるを得ない。とにもかくにも、先は大きくなくては勝負にならないのがアメリカだ。ニールはそうした土壌の上に彼は彼なりのちゃんとしたコンセプトがあっての大きさなのである。大きさによってメッセージの意味がまるで違ってくると、みる人にとって小さなものと比べたとき、大きなものの方に違う反応を示すこと、要するに大きなものだと人々と対峙できるし、自ずと反応することを要求するものだ。彼の強い個性が形の大きさのこだわりに表出されているのである。

彼の作りだす形体はおもに三種類である。



上　アトリエにて(1984年)
下　後方左から，ウィリアム・ハント(WILLIAM HUNT)氏，梶谷胖(BAN KAJITANI)氏と共に

一つは、壁を意識した円盤状のフォルム、一つは、中央部に小さな開口部のある丘状のフォルム、いま一つは、ろくろにより作りだされた異なる二種類の盤状フォルムの構成作品であろう。これらいずれの作品も彼の巧みな技と知によって、極く極く自然な土の表情をみせるのである。そのためには、彼のかなり計算しつくされた付加的行為がなされていることは勿論である。生々しい土の表情を定着するための手段として、いわゆる水挽きされたフォルム上に泥漿の化粧掛けが行なわれる。この単純な化粧掛けの技法が、彼にとって彼のコンセプトにより近ずけるための重要な技法なのだ。化粧掛けの色は濃い茶色、テラコッタ色、オレンジ色、黄褐色、青そして白と限られた色が使われている。なかでも盤状のフォルムの中央にグラデーション的に配される白は特に重要で、平板なフォルムに深遠さを与えると同時に、クールな世界へと転換させるのである。そして、仕上げのための低火度による焼締めが、宇宙世界を想わせるような造形をより強く作りだしている。加飾的にろくろの遠心力に対応するかのような弧を、指頭や櫛目でフォルムの縁から内側に向かってさり気なく描くことによって、また更にクレータ的なパターンを点在させることによって、はるか彼方から眺めるというよりは、みるものを広大な宇宙をさまようような幻想世界へと導くのである。

(HIDETO SATONAKA 陶芸家)

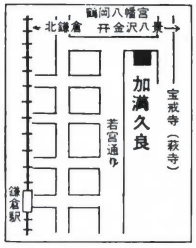
●ニール・テトコウスキー氏の日本初個展は、7月18日(木)～31日(水)まで東京・赤坂グリーン・ギャラリーにて開催されました。

また、同氏によるワークショップ(スライド・レクチャー、実技)が7月25日(木)午後2時から、茨城県工業技術センター・窯業指導所(笠間市下市毛55－4・西尾勝三所長)の協力で行なわれました。

1984年ニューヨーク市でおこなわれたデモンストレーション風景

半地上式穴窯十昼夜の焼成

神崎紫峰常設展示



加満久良

鎌倉市雪ノ下1－14－12
電話〈0467〉25－4348